

宮本
坂口
書
全集

第七
卷

冬
樹
社

定本 坂口安吾全集 第七卷

定価二〇〇〇円

昭和四十二年十一月十五日初版第一刷発行

著者 坂口安吾

発行者 滝泰三

印刷所 三容堂印刷株式会社

東京都千代田区神田錦町二ノ二

製本所 加藤三代治製本所

東京都新宿区早稻田鶴巻町二二番地

発行所 冬樹社

東京都千代田区九段南二の四の十四

電話東京(三六三)三四二一(大代表)

振替東京七七五七

定本
坂口安吾全集
第七卷

監修

石川 淳

河上徹太郎

小林 秀雄

獅子文六

編纂

奥野 健男

檀 一雄

平野 謙

福田 恆存

題字

石川 淳

第七卷
目
次

ヒロ伝道者	11
FARCE に就て	13
新らしき性格感情	23
新らしき文学	24
ドストエフスキーとバルザック	28
長島の死に就て	31
谷丹三の静かな小説	36
文章その他	42
無題	47
悲願に就て	49
清太は百年語るべし	57
想片	59
枯淡の風格を排す	60
日本人に就て	67
文学の一形式	71
牧野さんの死	75

75 71 67 60 59 57 49 47 42 36 31 28 24 23 13 11

牧野さんの祭典によせて	85
現実主義者	87
桜枝町その他	89
スタンダールの文体	90
囲碁修業	92
かげろう談義	96
茶番に寄せて	103
死と鼻唄	106
作家論について	109
文学のふるさと	111
醍醐の里	116
新作いろは加留多	118
ただの文学	120
日本文化私観	122
大井広介という男	142
剣術の極意を語る	146

146 142 122 120 118 116 111 109 106 103 96 92 90 89 87 85

春 春 論	149
講談先生	181
伝統の無産者	183
あきらめアネゴ	184
罅堂小論	185
処女作前後の想い出	192
墮 落 論	197
ちかごろの酒の話	204
文芸時評	208
通俗作家 荷風	212
欲望について	215
デカダン文学論	219
足のない男と首のない男	228
ヒンセザレバドンス	232
肉体自体が思考する	237
続墮落論	239

戯作者文学論	246
通俗と変貌と	261
花田清輝論	265
未来のために	267
二合五勺に関する愛国的考察	268
私 は 誰？	276
日映の思い出	282
世評と自分	284
余はペンメイす	285
恋 愛 論	291
酒のあとさき	296
大阪の反逆	300
貞操の幅と限界	309
私の小説	311
俗物性と作家	314
私の探偵小説	317

教祖の文学	319
悪妻論	331
推理小説について	335
観念的その他	340
理想の女	342
パンパンガール	345
思想なき眼	350
娯楽奉仕の心構え	353
新カナヅカイの問題	359
阿部定さんの印象	365
詐欺の性格	368
長さの問題ではない	380
観戦記	382
阿部定という女	397
天皇陛下にささぐる言葉	399
現代とは？	405

319 331 335 340 342 345 350 353 359 365 368 380 382 397 399 405

新人へ	407
第二芸術論について	409
ヤミ論語	411
モン・アサクサ	429
机と布団と女	434
わが思想の息吹	436
帝銀事件を論ず	439
白井先生に捧ぐる言葉	446
将棋の鬼	447
私の葬式	451
不良少年とキリスト	453
敬語論	467
集団見合	473
呉清源観戦記	476
太宰治情死考	478
志賀直哉に文学の問題はない	483

407 409 411 429 434 436 439 446 447 451 453 467 473 476 478 483

呉 清 源

切捨御免

戦争論

ヨーロッパ的性格、ニッポン的性格

私の 碁

インテリの感傷

西荻随筆

僕はもう治っている

碁にも名人戦つくれ

神経衰弱の野球美学論

深夜は睡るに限ること

戦後新人論

便乗型の暴力

由起しげ子よエゴイストになれ

温 浴

推理小説論

“歌笑”文化

「異邦人」に就て

我が人生観

エゴイズム小論

風俗時評

思想と文学

男女の交際について

文人囲碁会

解 説

奥野健男

作家論

檀 一雄

解 題

563

566

567

633

638

640

642

646

649

659

665

評

論

ピエロ伝道者

空にある星を一つ欲しいと思いませんか？ 思わない？

そんなら、君と話をしない。

屋根の上で、竹竿を振り廻す男がいる。みんなゲラゲラ笑ってそれを眺めている。子供達まで、あいつは気違いだね、なぞと言う。僕も思う。これは笑わない奴の方が、よっぽどどうかしている、と。そして我々は、痛快に彼と竹竿を、笑殺しようではないか！

しかし君の心は言いはしないか？ 竹竿を振り廻しても所詮はとどかないのだから、だから僕は振り廻す愚をしないのだ、と。もしそうとすれば、それはあきらめているだけの話だ。君は決して星が欲しくないわけではない。しかし僕は、そういう反省を君に要求しようと思わない。又、「大人」になつて、人に笑われずに人を笑うことが、君をそんなに偉くするだろうか？ なぞとききはしない。その質問は君を不愉快にし、

又もし君が、考え深い感傷家なら、自分の身の上を思いやつて悲しみを深めるに違いないから。

僕は礼儀を守ろう！ 僕等の聖典に曰く、およそイエス・ノオをたずぬべからず、そは本能の犯す最大の悪徳なればなり、と。又曰く、およそイエス・ノオをたずぬべからず。犬は吠ゆ、これ悲しむべし、人は吠えず、吠ゆべきか、吠えざるべきかに迷い、迷いて吠えず、故に甚しく人なり、と。

竹竿を振り廻す男よ、君はただ常に笑われてい給え。決して見物に向つて、「君達の心にきいてみろ？」と叫んではならない。「笑い」のねうちを安く見積り給うな。笑い声は、音響としては騒々しいものであるけれど、人生の流れの上では、ただ静粛な聲音である時がある。竹竿を振り廻す男よ。君の噴飯すべき行動の中に、泪や感慨の裏打ちを暗示してはならない。そして、それをしないために、君の芸術は、一段と高尚な、そして静かなものになる。

日本のナンセンス文学は、行詰つていと人々はいふ。途方もない話だ。日本のナンセンス文学は、まだナンセンスにさえならない。井伏氏や中村氏の先駆者としての立派な足跡は認めなければならない。そして彼等はよき天分をもつ芸術家である。しかし正しい見方からすれば、あれはナンセンス

ではない。ことに中村氏は、笑いの裏側に、常に心臓を感じさせようとする。そして或時は奇術師のように、笑いと涙の混沌をこねだそうとする。ナンセンスは「意味、無し」と考へらるべきであるのに、今、日本のモダン語「ナンセンス」は「悲しき笑い」として通用しようとしている。此の如き解釈を持つモダン人種のために、「悲しき笑い」は美しくき奇術であるかも知れない。そして中村氏のナンセンスは彼等を悲しめますかも知れない。しかし、人を悲しめますために笑いを担ぎ出すのは、むしろ芸術を下品にする。笑いは涙の裏打ちによって静かなものにはならない。むしろその笑いは、騒がしいものになる。チャップリンは、二巻物の時代だけでも立派な芸術家であったのだ。

いつであったか、セルバンテスのドン・キホーテは最も悲しい文学である、アメリカの誰かが賞讃していたのを記憶している。アメリカらしい悪趣味な讃辞であると言わなければならない。成程、空想癖のある人間ならば、ドン・キホーテの乱痴気騒ぎを他人ごとでは読みすごせない。我々は、物静かな聲音に深く心を吸われる。それでいい。なぜ「笑い」が「笑い」のまま芸術として通用できぬのであろうか？ 笑いはそんなにも騒々しいものであろうか？ 涙はそんなにも物静かなものであろうか？

すべて「一途」がほとばしるとき、人間は「歌う」ものである。その人その人の容器に順って、悲しさを歌い、苦しさを歌い、喜びを歌い、笑いを歌い、無意味を歌う。それが一番芸術に必要なのだ。これ程素直な、これ程素朴な、これ程無邪気なものはない。この時芸術は最も高尚なものになる。素直さは奇術の反対である。そして、この素直さから、その人柄にしたがって、涙の裏打をした笑いがほとばしるなら、それはそれで一番正しい。そして中村氏は、かなり本質的に、「悲しき笑い」の持ち主ではある。しかし中村氏は、往々にして無理な奇術を弄している。それはいいけない。

日本では、本質的なファースとして、古来存在していたものは、寄席だけのようである。勝れた心構えの人によって用いられたなら、落語も立派な芸術になる筈である。昔は知らない。少くとも今の寄席は、遺憾ながら話にもならない。僕の知る限りで、「莫迦莫迦しさ」を「歌」った人は、数年前に死んだ林屋正蔵。今の人では、古今亭今輔。それだけ。

日本のナンセンス文学は、涙を飛躍しなければならない。

「莫迦莫迦しき」を歌い初めてもいい時期だ。勇敢に屋根へ這い登れ！ 竹竿を振り廻し給え。観衆の涙に媚び給うな。

彼等から、それは芸術でない、ファースであると嘲笑されることを欣快とし給え。しかしひねくれた道化者になり給うな。寄席芸人の卑屈さを学び給うな。わずかな術学をふりかざして、「笑う君達を省みよ」と言い給うな。見給え。竹竿を振り廻す莫迦が、「汝等を見よ！」と叫んだとすれば、おかしいではないか。それは君自身をあさましくするだけである。すべからく「大人」になろうとする心を忘れ給え。

忘れな草の花を御存じ？ あれは心を持たない。しかし或日、恋になやむ一人の麗人を慰めたことを御存じ？

蛙飛び込む水の音を御存じ？

FARCE に就て

芸術の最高形式はファルスである、なぞと、勿体振って逆説を述べたいわけでは無論ないが、然し私は、悲劇や喜劇よりも同等以下に低い精神から道化が生み出されるものとは考えていない。然し一般には、笑いは泪より内容の低いものとせられ、当今は、喜劇というものが泪の裏打ちによってのみ危く抹殺を免かれています。道化の如き代物は、芸術の埒外へ投げ捨てられているのが普通である。と言って、それだからと言って、私は別に義憤を感じて茲に立上った英雄では決して無く、私の所論が受け容れられる容れられないに拘泥なく、一人白熱して熱狂しようとする——つまり之が、即ち拙者のファルス精神であります。

ところで——

(まず前もって白状することには、私は浅学で、此の一文を草するに当たっても、何一つとして先人の手に成った權威ある

文献を渉猟してはいないため、一般の定説や、将又ファルスの發生なぞということに就て一言半句の差出口を加えることさえ不可能であり、從而、最も誤魔化しの利く論法を用いてやろうと心を砕いた次第であるが——この言草を、又、ファルス精神の然らしめる所であらうと善意に解釈下されば、拙者は感激のあまり動悸が止まって卒倒するかも知れないのであるが——

扱て、それ故私は、この出鱈目な一文を草するに當つても、敢て世論を向うに廻して、「ファルスといえども芸術である」なぞと肩を張ることを最も謙遜に差し控え、さればとて、「だから悲劇のみ芸術である」なぞと言われるのも聊か心外であるために、先ず、何の躊躇らう所もなく此の厄介な「芸術」の二文字を語彙の中から採殺して（アア、清々した！）、悲劇も喜劇も道化も、なべて一様に芝居と看做し、之を創る「精神」にのみ観点を置き、あわせて、之を享受せらるるところの、清浄にして白紙の如く、普く寛大な読者「精神」にのみ呼びかけようとするものである。

次に又、この一文に於て、私は、決して問題を劇のみに限るものではなく、文学全般にわたつての道化に就て語りたいために、（そして、私は言葉の厳密な定義を知らないのに、暫く私流に言わして頂くために——）仮りに悲劇、喜劇、道化に各々次のような内容を与えたいと思う。A、悲劇とは

大方の真面目な文学、B、喜劇とは寓意や泪の裏打ちによつて、その思いありげな裏側によつて人を打つところの笑劇、小説、C、道化とは乱痴氣騒ぎに終始するところの文学。

と言つて、私は、A・Bのジャンルに相当する文学を輕視するといふのでは無論ない。第一、文学を斯様な風に類別するといふことからして好ましくないことであり、全ては同一の精神から出發するものには違いあるまいけれど——そして、それだから私は、道化の輕視される当節に於て（敢て當今のみならず、全ての時代に道化は不遇であつたけれども——）道化も亦、悲劇喜劇と同様に高い精神から生み出されるものであつて、その外形のいい加減に見える程、トンチンカンな精神から創られるものでないことを言い張りたいのである。無論道化にもくだらない道化もあるけれども、それは丁度、くだらない悲劇喜劇の多いことと同じ程度の責任を持つに止まる。

そこで、私が最初に言いたいことは、特に日本の古典には、Cに該当する勝れた滑稽文学が存外多く残されている、このことである。私は古典に通じてはいないので、私の目に触れた外にも幾多の滑稽文学が有ることは思うが、日頃の愛読する數種を挙げて『狂言』、西鶴（『好色一代男』、『胸算用』等）、『浮世風呂』、『浮世床』、『八笑人』、『膝栗毛』、平賀源内、京伝、黄表紙、落語等の或る種のもの等。